

沖永良部島における湧水地調査と湧水地を活用したESDの実践

萩原 豪 (鹿児島大学稲盛アカデミー 特任講師)

元木 理寿 (常磐大学コミュニティ振興学部 助教)

Research Project on the Springs and Practices of ESD Using the Springs in Okinoerabu Island

HAGIWARA, Go Wayne

(Senior Assistant Professor, Kagoshima University Inamori Academy)

MOTOKI, Masatoshi

(Assistant Professor, College of Community Development, Tokiwa University)

キーワード：沖永良部島、湧水、ESD（持続可能な開発のための教育）、生活文化、持続可能な社会

Abstract:

Okinoerabu Island has a rich natural habitat and a unique culture that coexist, and it is very important that we tie these to the next generation. Regarding water resources, Okinoerabu Island is one of the coral upheaval islands and it has been historically difficult for residents to get water resources for their daily lives. There are used to be more than 130 springs using for residential lives, for drinking, cooking, washing clothes and taking bath, etc. Because the local government (China Town and Wadamari Town) developed the infrastructure in the early 1950s, most of the residents stopped using natural springs for their daily use. Now there are only a few records of natural springs in Okinoerabu Island and the residents might forget their history and live culture with the springs. At first, this project tried to make a "spring location map" for basic reference by fieldwork, using GPS information and interviews of the residents. In this project, I also describe a community improvement plan called "Sustainable Society". I would like to utilize ESD and this concrete example, and would like to seek the possibility of the ESD promotion in Okinoerabu Island in near future. This interim report covers the research study through 2012.

Keywords: Okinoerabu Island, spring, ESD (Education for Sustainable Development), life culture, sustainable society

1. はじめに

本研究は沖永良部島における湧水地に着目し、人・自然・地域・文化などの「つながり」の再生と再構築について、水資源、特に湧水・暗川（クラゴウ）を軸として、地域密着型の環境教育・ESD（持続可能な開発のための教育）を展開していく可能性について検討を行うことを目的として、2010年3月より元木理寿・常磐大学コミュニティ振興学部助教と行っている共同プロジェクトである。

本研究プロジェクトのうち、湧水地の水資源管理を主軸としたESD展開に関わる研究活動については、2012（平成24）年度科学研究費補助金の基盤研究（C）「沖永良部島における水資源を活用したESD展開に関する基礎的研究」（研究代表者：元木理寿）として採択された。この研究プロジェクトには、筆者の他に野村卓（北海道教育大学教育学部釧路校准教授）が研究分担者として参加しており、元木が水資源管理について、野村が湧水地と水田管理について、筆者がESD展開について、それぞれ担当している。本稿では科研費研究を含めた本研究プロジェクトの全体について、2012年10月までの研究の中間報告を行う。

2. 湧水地調査の現状

2010年3月から始めた湧水地調査では、沖永良部島における湧水地の現状は、これまでの調査結果から大きく7つに分類することができる。

- (1) 記録に残っており、湧水地として現存している（案内板あり）
- (2) 記録に残っており、湧水地として現存している（案内板なし）
- (3) 記録には残っているが、湧水地として現存せず形跡だけが残っている（案内板なし）
- (4) 記録には残っているが、湧水地として現存せず形跡も残っていない（案内板あり）
- (5) 記録には残っているが、湧水地として現存せず形跡も残っていない（案内板なし）
- (6) 記録には残っているが、湧水地そのものの存在を特定できない
- (7) 記録には残っていないが、湧水地として現存している

分類(1)については、和泊町では国頭字のクラゴウ、喜美留字のクラゴウ、和字のソージゴウ、知名町では瀬利覚字のジッキョヌホー、住吉字のクラゴウ、正名字のクラゴウなどが挙げられる。これらの湧水地はその来歴を記した看板が掲示されており、水場まで近づくことができる¹。特に和泊町では、自然環境保護区に指定されている27ヶ所のうち、15ヶ所が湧水地であるため、自然環境保護区指定の看板が設置されている。しかし、中には和泊町玉城字にあるウシュゴウのように看板の文字が消えてしまっているものもある。知名町の場合は、多くは字や関係者が独自に設置した看板が設置されていることが多

1 国頭字のクラゴウや正名字のクラゴウについては、一応、水場まで下りることができるようになっているが、石段などが整備されていないため、下りるには注意が必要である。

く、知名字のシャギーやアダngoはこれに当たる。また、上平川字のショヌホーのようにショヌホー公園として整備されたものもある。ショヌホー公園にはこの湧水地周辺に生息している生物に関する看板は設置されていたが、湧水地としての由来などが記された看板は設置されていない。また、これらのように看板などが設置されている湧水地は限られており、看板が設置されていない湧水地が大半を占めているのが現状である。

分類(2)として、和泊町内城字のウイバルゴや知名町知名字のフグンゴなどを挙げることができる。ウイバルゴは地域住民が利用しており、周囲の草などを刈っているが、看板などは設置されていない。またフグンゴは地域住民が掃除をしており整備されているが、看板などはまったく設置されていない。また名前と場所は特定できているものの、現在は湧水地に続く道が閉ざされており現状を確認することができないものもある。これには和泊町和字のガラドーやなどが挙げられる。



図1 フグンゴ（知名町知名字）（2010年12月3日、筆者撮影）

分類(3)としては、和泊町喜美留字のヒダギダと知名町徳時字のユダギョーを挙げるることができる。ヒダギダもユダギョーもかつて使われた湧水地としての形跡は確認することができたが、どのように利用されていたのかを確認することができていない。これらは現在も調査中である。



図2 ヒダギダ（和泊町喜美留字）（2011年8月1日、筆者撮影）

分類(4)の例として、和泊町和泊字のイシゴと知名町芦清良字のミズクボが挙げられる。イシゴはすでに埋め立てられてしまっており、かつてイシゴがあった場所に看板が設置されており、周辺はイシゴ公園として整備されている。芦清良字のミズクボもすでに湧水地としては存在していないが、字がミズクボを「世間遺産」として認定して看板を設置している。



図3 イシゴ (和泊町和泊字) (2011年2月27日、筆者撮影)

分類(5)の例として、和泊町赤嶺字のヒータティゴーや知名町下城字のフナダなどを挙げられる。ヒータティゴーやフナダは土地整備事業により埋め立てられたことは分かっているが、すでに畑になってしまっているため、かつての湧水地の位置を厳密に特定することができない。分類(4)のイシゴのように埋め立てられている湧水地は和泊町に多くあるが、かつて湧水地があった場所を特定できる例は非常に少ない。

分類(6)については現在も調査中であるが、ここに分類される湧水地は、土地整備事業などによりかつての土地の原型を留めていない場所に存在していたと考えられる。このように記録上はあったはずの湧水地が見つからないものは、30ヶ所以上ある。

分類(7)についてはさらなる精査が必要な湧水地である。例えば、2012年5月の現地調査において、知名町住吉字の海岸に湧き出ている湧水地を確認した。地元での聞き取り調査によれば、かつてこの湧水地を利用していたということまではわかったが、その名前を特定することができていない。

2 「世間遺産」とは写真家の藤田洋三が提唱するものであり、「庶民が残した手仕事や暮らしの記憶を写真に留めようとする」ものである。「世界遺産」とは違い、市民が自由に選定することができることに特徴がある。この活動は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が行っている子どもゆめ基金の助成活動や、愛知県津島市ではNPO法人まちづくり津島などの活動を挙げることができる。NPO法人まちづくり津島では「世間遺産」を「いつまでも変わらないと思っていた景色や建物がどんどんなくなっていく。こんな中で、町の中にいつまでもとどめておきたいもの、思わず人に伝えたくなるもの」と定義しているが、明確な定義はなく、主体によってその定義は異なっている。芦清良字の場合、ミズクボのほかにも拝山神社などが「世間遺産」として認定されている。

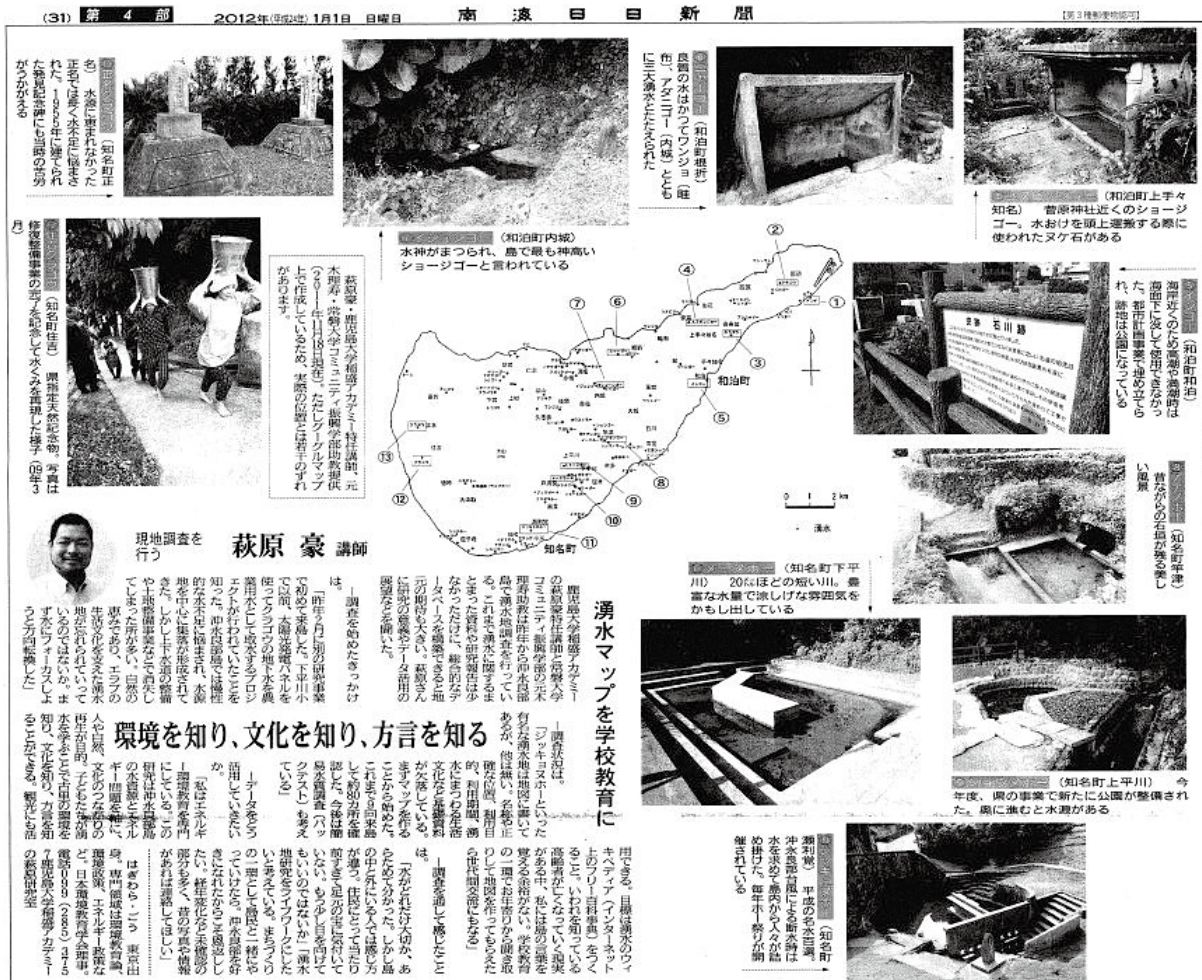


図4 南海日日新聞、2012年1月1日号、31面。

3. 沖永良部湧水マップ

2011年11月18日から20日に沖永良部島で開催された第22回日本ウミガメ会議（沖永良部会議）（主催：NPO法人日本ウミガメ協議会）において、現地実行委員会のご厚意により本研究プロジェクトの中間報告（ポスター発表）を行う機会をいただいた。その際、町誌や字誌などの記録に残っている130ヶ所の湧水・暗川（クラゴウ）のうち、これまでの調査で特定することができた80ヶ所をプロットした「沖永良部島湧水マップ（暫定版）」を発表、来場者に配布した。この時に発表した内容については、南海日日新聞（2012年1月1日）に特集記事が組まれた（図4）。

この沖永良部湧水マップの制作は元木が担当しており、現在地図に湧水地の位置と記録に残っている湧水（地）の名称を確認しながら作業を進めている。図5の湧水地マップは2012年10月現在の段階で作成中のものである。

前述の分類(1)から(3)および(7)にある湧水地の場所を確認することができたものについては、ほぼプロットを終えているが、分類(4)から(6)としている湧水地の存在を特定することができないものについては、その位置を確定させることが非常に難しい状態である。現地調査の際には国土地理院発行の25,000分の1地形図と、『ゼンリン住宅地図 和泊町・知名町』（2009年10月版）を組み合わせて使っている。湧水地が活発に利用されていた1950～60年代（昭和30年代）の分布図を確認できていないため、当時の正確な位置を把握するにいたっていない。



図5 現在作成中の沖永良部湧水マップ（改訂版）

4. 湧水地を活用したESDの実践

和泊町教育委員会と知名町教育委員会では、地域学習のための副読本として「わたしたちの沖永良部島」を発行しており、沖永良部島の小学校で利用している。この中では生活用水に関わることとして、湧水地やため池などに関する記述はあるものの、地域のどこに湧水地が位置しているかなどの記載は見られなかった。また小学校への聞き取り調査では、教員の多くが沖永良部島出身者ではないこと、湧水地を地域学習に用いようとしても約3年という短い任期の中では、沖永良部島にある湧水地の位置やそれらに関わる歴史などについては把握しきれない、などの問題点が明らかになった。その反面、年配の地域住民からは湧水地の歴史を語り継ぐことの重要性を聞くことが多く、これらの声が地域学習に反映されていないことも明らかになった。

筆者らはこれまでの現地調査により、沖永良部島の湧水地を環境教育・ESDの教材として用いることは大きな意義があると考えに至った。そして、これまでの調査結果を基に沖永良部島の小学校関係者に「湧水地を活用したESDの実践」について協力依頼をしたところ、知名町立下平川小学校と和泊町立大城小学校、両校の校長のご厚意により、両校において2012年度の教育内容に「湧水地を活用したESD実践」への協力を快諾していただいた。下平川小学校では4年生の夏休みの自由研究として、大城小学校では6年生の総合的

な学習の時間に組み入れていただいた。なお、両町の教育委員会からは、地域学習および総合的な学習の時間の内容については各小学校の裁量範囲内としているため、小学校との直接のやりとりを認められた経緯があることを申し添えておく。

両小学校にはこれまでにまとめた資料のうち、校区内にある湧水地の名前と位置を記した地図を渡し、調査方法の概要を伝えた。これらを基にして児童が自ら調査してくることをお願いした。湧水地については、児童が実際に行って見ることができるという前提から、湧水地として現存するもの（前述した分類のうち(1)と(2)のみ）についてのみ、資料提供を行った。また児童の安全を確保するため、児童が近寄ることが危険と判断される場所については、各小学校の判断により削除するようにした。

湧水地を活用したESDの実践の結果については、調査中のため別稿に譲りたい。

5. 課題と展望

これまでの現地調査によって明らかになった湧水地は、前述したように大きく7つに分類することができ、それらを沖永良部湧水マップとして整理しているところである。しかしながら、この湧水マップにおける湧水地の名称の記載についての問題が浮き彫りになってきた。例えば、沖永良部島には「クラゴウ」と呼ばれる湧水地が何ヶ所も存在するが、それらの表記を「クラゴウ」にするのか、それとも「クラゴー」にするのかは確定していない。本稿ではすべて「クラゴウ」に表記を統一しているが、町誌や字誌、その他の文献においては表記が統一されていない。よって、図5においては、湧水地の名称は記載を基にしている。また沖永良部島内においても方言の違いにより、その呼び方が異なる場合があることが明らかになってきた。字ごとの歴史や文化を尊重するのであれば、それぞれの呼称を用いるべきではあるが、字内でも呼称が違う場合があり、どの呼称を用いるかは今後の課題のひとつであると言えよう。

また、本研究の対象としている湧水地は、生活用水、特にかつてより飲料水として用いていた湧水地を指している。しかし沖永良部島の中でも、湧水がない地域では生活用水のため池や深井戸の水を用いていたところもある。しかし川上（2004）が言及しているように、ため池の数は2000年の時点で知名町23ヶ所、和泊町83ヶ所あり、この数は増えている。また深井戸についても知名町95ヶ所（1986年調査）、和泊町518ヶ所（1970年代調査）が確認されている。これらのため池や深井戸をすべて調査対象とすることは、本研究の中では非常に難しい。そこで、これまでの調査で字内に湧水がなく、生活用水をため池や深井戸に頼っていた字についてのみ、ため池や深井戸を調査対象とすることに調査方針を改めるに至った。

例えば、知名町余多字には調査対象としているような湧水地がなく、余多川の水を生活用水としていた。しかし余多川の水を直接生活用水にするのではなく、チンキョと呼ばれる濾過施設を設置して生活用水を得ていた。本研究の中で重要な調査対象となっている正月の若水取りについて、余多字ではこのチンキョのひとつであるウタゴの用水を用いていたことが分かっている（図6）。そのため余多字における調査活動では、厳密には湧水ではないものの、チンキョを湧水地として扱うことにした。



図6 ウタゴ（知名町余多字）（2012年10月17日、筆者撮影）

2012年9月現在、沖永良部島における湧水地調査は次の段階に進んだと言える。これは科学研究費補助金基盤研究（C）「沖永良部島における水資源を活用したESD展開に関する基礎的研究」として、湧水地を活用した当時の生活についての検討を始めたことが大きい。特に当時の水田風景についての調査活動に進むことができたのは、湧水地が人々の日常生活とどのように密接に結びついていたのかを明らかにする上で、大きな進展である。しかしながら、当時の資料が非常に限られており、その大半を地域住民への聞き取り調査に頼らなければならない。これは今後の研究を進める上で、大きな課題であると言えよう。

現在、和泊町立大城小学校と知名町立下平川小学校の協力を仰いで、「湧水地を活用したESD実践」を試験的に行っていることはすでに述べた通りである。本研究で蓄積していく研究成果をいかにして、小学校における湧水地を活用した地元学習の教材に昇華させていくかについては、本年度に両小学校で行った実践の結果を基にして再検討していく必要がある。

《謝辞》

本研究の調査活動を行うにあたり、多くの方からのご協力をいただいた。沖永良部島での現地調査においては、特に林富義志氏（前・知名町役場生涯学習課長）、伊集院達之佑氏（前・知名町大津勘区長）、山下芳也氏（沖永良部ウミガメネットワーク）、前利潔氏（知名町中央公民館・日本島嶼学会理事）、西田實氏（知名町中央公民館・図書館前館長、沖永良部与論地区広域消防長）、先田光演氏（和泊町歴史民俗資料館館長・えらぶ郷土研究会会長）、川上忠志氏（南日本新聞沖永良部販売所）、宮内茂喜氏・田中勇一氏（おきえらぶフローラル株式会社わくわく）、島田兵次郎氏（玉城字）、村山敏美氏・としえ氏（大城字）の各位から情報提供をいただいた。特に小学校におけるESD実践については、前田勇氏（和泊町立大城小学校長）、前勝裕氏（知名町立下平川小学校長）、そして両町の教育委員会・小学校から多大な協力をいただいた。また知名町と和泊町の役場・区長会の方々

にはフィールドワークにおいて多大な便宜を図っていただいた。この研究を遂行するに当たりお世話になったすべての方々に対し、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

《参考文献》

沖永良部島100の素顔編集委員会編『沖永良部島100の素顔—もうひとつのガイドブック』東京農業大学出版会、2008年。

川上忠志「沖永良部島の湧水・ため池調査」『沖永良部郷土研究会報 えらぶせりよさ』25号、2004年、p.9。

萩原豪・元木理寿「鹿児島県・沖永良部島における水資源とエネルギー問題を中心としたESD（持続可能な開発のための教育）の現状と課題」『鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要』2号、2010年、pp.1-16。

萩原豪・元木理寿「沖永良部島における湧水地調査プロジェクト」『鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要』3号、2012年、pp.345-325。

元木理寿・萩原豪「鹿児島県沖永良部島における水環境と生活用水利用の現状」『常磐大学コミュニティ振興学部紀要 コミュニティ振興研究』13号、2011年、pp.57-68。

沖永良部島ウミガメネットワーク <http://erabuumigame.ti-da.net/>

沖永良部島湧水愛好会・神社・洞窟・風景 <http://yuusui.ti-da.net/>